

強意副詞の脱語彙化と語彙化

—— *swithe* と *fast* の場合 ——

小笠原 清 香

はじめに

強意語は文法化のプロセスを辿り、その過程で本来の語彙的意味を失い脱語彙化 (delexicalization) を遂げるという見解がこれまでの先行研究では一般的であった (Sinclair 1992; Partington 1993; Lorenz 2002)。¹ また強調という感情表現の機能をもつ強意語は、使用され続けるとその強調効果は次第に薄れてしまうため、一種の流行語の性質を持ち、常に新たな語にとって代わられていくという点もこれまでの先行研究で頻繁に論じられてきた (Hopper & Traugott 1993)。このように、強意語というと、その注目される変化の性質は内容語から機能語へと変化する文法化現象とそれに伴う脱語彙化であり、各語彙がその後を得た意味に着目されることはなかった。

本稿では OE から ME にかけての一般的な強意語であった *swithe* と ME の主要な強意語の一つである *fast* について、これらが強意語として流行した後に、再度語彙としての意味を獲得していることを指摘し、強意語の意味変化に語彙化現象 (lexicalization) が起きていることを論じる。

1. 調査対象と方法

OE から ME にかけての主要な強意語は *swithe* と *ful* が代表的である。しかしながら、MED や Mustanoja (1960) が説明するように、*fast* も ME における主要な強意語のうちの一つとして広範に用いられた副詞であった。本稿では、まず始めに強意語の定義に関する先行研究の見解をまとめた上で、ME における強意語について独自に定義づけを行う。事例として *swithe* と *fast* を取り上げ、この二語に共通する強意から ‘quickly/rapidly’ への意味変化の過程を見る。*swithe* と *ful* に関してはその文法化現象について論じられることが多く、とりわけ *swithe* についてはこの語が最後に発達させた ‘quickly, soon’ の語義にはこれまで目を向けられてこなかったが、これらの迅速に関わる語義に着目することで、強意語 *swithe* と *fast* に見受けられる語彙化の過程を明らかにしたい。データの分析としては、*swithe* に関しては OE から EModE にかけての生起数と頻度を詳細に分析している Méndez-Naya (2003) による *Helsinki Corpus of English Texts* (Rissanen et al. 1991) を利用した調査結果を引用し、*fast* に関しては ME 1 (1150-1250) から EModE3 (1640-1710) までの生起数と用例を調べた。また用例の意味分析を通して、生起数、意味の変遷と共に、強意語としての使用が高頻度であったことを確認する。以上の手順により、各語の強意語としての興隆と衰退を比較しながら、共通する語彙化のプロセスを見ていく。

2. 強意語の定義

2.1 現代英語における強意語の定義と分類

強意語の文法カテゴリーについては、これまで様々な議論がなされてきた。現代の強意語研究では、Partington (1993)、Lorenz (2002) をはじめとし、強意語の機能は厳密に規定すると形容詞修飾にあると言及されることが多い。しかし Allerton (1987) が、“Unfortunately neither the syntactic nor the semantic basis for the intensifier class is really decisive” (16) と指摘するように、*very* や *too* などの形容詞修飾のみの機能を持つ強意語は限られており、*absolutely*, *entirely*, *rather*, *slightly* など、形容詞・副詞・動詞修飾の機能を持つ語が多い。そのため、強意語の修飾対象に関する規定は研究事例により異なり、強意語というラベルに対する一定の定義付けはこれまでなされてこなかった。Méndez-

Naya (2003) は、先行研究における定義の相違を総括すると以下のような表現は全て強意語に認定できると述べている。

- (1) I *greatly* admire his paintings. (verb modifier)
 - (2) The play was a *terrible* success. (noun modifier)
 - (3) The article was *extremely* interesting. (adjective modifier)
 - (4) He was driving *very* quickly. (adverb modifier)
 - (5) He is *much* in favour of the US attack on Afghanistan. (PP modifier)²
- (Méndez-Naya 2003: 373)

このような統語的特質に関する議論に加え、強意語の意味性質についても研究者により見解が異なっている。Klein (1998), Biber et al (1999) は強意語を程度が高いことを意味する語に限定しているが、高低に関わらず程度を表すものはすべて強意語とみなす見解も多い (Lorenz 2002, Quirk 1984)。Quirk et al (1985) では強意語をその機能および意味範疇から、*amplifiers* と *downtoners* に分類し、さらに *amplifiers* は *maximizers* と *boosters* の二つの下位区分を持ち、*downtoners* は *approximators*, *compromisers*, *diminishers*, *minimizers* の四つの下位区分を持つものとして定義されている。³ 本稿で扱う強意語は、この分類における *booster* に相当するものである。その機能について簡潔にまとめると、*maximizer* (*absolutely, completely, entirely, totally* など) が段階性のある形容詞の最も高い程度を表すのに対し、*booster* (*greatly, intensely, severely, strongly, violently, much, well* など) は様々な程度に対応した強意を示す表現である。

2.2 ME における強意副詞

2.2.1 Mustanoja (1960) による強意語の分類

前節では現代英語における主な強意語の統語および意味的規定について概観したが、本節では ME に関する文法書および辞書の語義説明において、強意語がどのように記述されているのかを見ていきたい。Mustanoja (1960) では *degree adverbs* の項に *intensifying adverbs* と *weakening adverbs* の二つのカテゴリーが設けられている。*intensifying adverbs* の項では 38 語の強意副詞が列記されており、どの副詞も強調の意味を持つものの、Mustanoja は修飾対

象による区別を行っていない。語義規定については、intensifying adverbs とは Quirk の用語を用いれば amplifier であり、weakening adverbs は downtoner に相当するものであると考えられる。ここで intensifying adverbs に含まれている *swithe* と *fast* に関する記述を見ていきたい。

‘Swithe (Swithely).’— From OE *swipe* ‘strong.’ In the meaning ‘extremely, very much, very’ this adverb is the most popular intensifier of adjectives, adverbs, and verbs in OE and early ME. ...*swipe* begins to give way to other intensifying adverbs, notably *full*, *well*, and *right*, in connection with adjectives and adverbs, and to *much* and *greatly* in connection with verbs. In the second half of the 14th century *swithe* is only occasionally found, and after 1450 it is no longer recorded as an intensifying adverb. (Mustanoja 1960: 325)

‘FAST(E).’ — The original meaning of this adverb is ‘immovably, firmly.’ In many cases its original modal function passes into an intensifying use, as in *fast asleep* and *fast by* (e.g., *the Tabard faste by the Belle*, Ch. CT A Prol. 719), and in conjunction with verbs (*she faste Ay biddynge in hire orisons ful faste*, Ch. CT G SN 140). (Mustanoja 1960: 318)

swithe は OE における ‘strong’ といった語義から、‘extremely, very much, very’ といった強意用法を獲得し、OE から初期中英語にかけて形容詞、副詞そして動詞を修飾する最も一般的な強意語であったが、その後は *full*, *well*, *right*, *much*, *greatly* などにとって代わられていった。また *fast* に関する記述においては、多くの例において、本来の modal function（様態を表す機能）が強意用法へと移り変わっていったと述べられているが、統語的規定のみならず、意味的規定についても、この modal function という漠然とした説明にとどまっている。ME においては強意語の文法カテゴリーの規定および意味の特定はあまり重要視されていなかった。こうした強意語の曖昧な意味区分は、*MED*, *OED* の記述においても同様である。

2.2.2 MED, OED における強意語の説明

Mustanoja (1960) によって説明されているように、*swithe* と *fast* が ME における強意副詞であったことは明らかである。しかしながら *HTOED* (*Historical Thesaurus of Oxford English Dictionary*) で強意語のカテゴリーを調べると、536 語の強意語があげられているにもかかわらず、*fast* は強意語としてエントリーされていない。これは *HTOED* のデータベースである *OED* の記述の仕方に原因があると考えられる。*OED* では *fast* の ME における強意語としての用法は ‘earnestly, diligently’ といった心理的強意の意味で説明されており、‘intensive’ という表現は用いられていない。おそらくこのことが原因で、*HTOED* では *fast* は intensifier のカテゴリーからはじかれていると言える。⁴ *swithe* の場合は *fast* とは対象的に *HTOED* では intensive adverbs のカテゴリーに振り分けられている。*OED* では *swithe* は以下のような語義説明が与えられている。

OED, s.v. *swithe*, adv.

† 1. Qualifying a finite verb or a participle: Strongly, forcibly; very greatly, very much, extremely, excessively; in *superl.* most, most especially.

† 2. Qualifying an adj. or adv.: Excessively, extremely, very. *Obs.*

このように *swithe* の場合は ‘very, greatly’ といった語義で説明されており、‘very’ が入ることで *HTOED* では強意語としてのカテゴリーに属しているものと考えられる。

OED では強意副詞とはみなされていない印象を受ける *fast* であるが、*OED* のカテゴライズとは異なり、*MED* では以下のように *swithe* と *fast* は強意語として説明されている。⁵

MED s.v. *swithe*, adv. 1a

As an intensive or an adv. of degree modifying a finite verb or ppl. [the meaning is largely contextual, and the precise gloss is determined by the verb being modified]

MED s.v. *faste*, adv. 9

As an intensive, with various verbs: (a) (strike stamp, knock) vigorously, hard; (b) (eat, sing, weep, play, talk, tell lies, argue) steadily, hard, much; (give) freely, much; (prosper) greatly; (c) (sleep) soundly; **ben faste on slepe (aslepe)**, be fast asleep; (d) (burn, rain, thunder, bleed) hard, much.

MED は *fast* についても “as an intensive” と強意副詞として説明しているが、*OED* および *HTOED* は *fast* の ME における意味を ‘earnestly, diligently’ といった modal adverb または verb degree modifier として説明している。⁶

ここまで見てきたように、強意語という呼称は非常に広義に用いられてきたため、厳密な統語・意味の規定は近年まで積極的にはなされてはこなかった。そのため強意語研究は現在も強意語の定義を行うことがまず前提となり、そしてその定義は個々の研究者や研究対象により異なるのが現状である。また、強意語の発達は “modal-to-intensifier shift” (Partington 1993: 181) を遂げていると説明される場合が多いものの、ME の *fast* の用例を検討すると、完全に modal function (様態を表す機能) を失っているとは言えない。*fast* の ME における用法のように modal adverb と intensifier の明確な区別ができない副詞も多い。こうした強意語の性質について、Bolinger (1972) では強意語は文法化が完全に遂げられたものと、ある程度文法化を遂げていると判断できるものに別れることが指摘されている。

ここで再び問題となるのは強意語の定義であるが、本論では動詞の程度を強化する、いわゆる verb degree modifier や modal adverb も含め強意語と見なし、*swithe*、*fast* を強意語として取り上げる。このように動詞を強意語の修飾対象に含めるのは *OED* や *MED* および Mustanoja (1960) の記述からも明らかなように、ME における強意語の修飾対象を限定することが困難な場合が多いためである。語形や統語環境からも形容詞と副詞の区別がつかない場合や、修飾対象が形容詞句または前置詞句であるのか動詞句であるのかという判断が極めて難しい用例も多い。特に韻文では語順はより柔軟になるために、こうした状況が生じやすい。統語的な規制を設けることはある文法現象を見る上では非常に重要であるものの、本論では強意の意味を得た語がどのように次の意味を派生させるのか、という意味変化の現象を考察することが目的であるため、文法カテゴリーにこだわらず、修飾対象の意味を強める語を強意語として扱う。

OE から ME において主要な強意語であった *swithe* と *fast* の通時的意味変化を考察し、これらが脱語彙化し強意語となった後に、再び語彙としての意味を

獲得しているという語彙化の現象に着目する。従来言及されてきた文法化現象といった具象領域から抽象領域への直線的な変化ではなく、強意語として意味が抽象化した後に具象の意味を発達させる変化のパターンがあることを明らかにしたい。

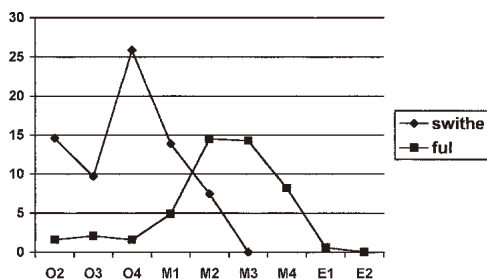
3. 強意語 *swithe*, *fast* の流行と衰退

OE の韻文および散文において最も一般的な強意副詞は *swithe* であり、これに続き *ful* の頻度が高かった。⁷ *swithe* は ME 初期にさしかかると次第に *ful* に取って代わられていく。*Helsinki Corpus* におけるこれらの生起数は、Méndez-Naya (2003) による表 1 の統計によれば、M1 (1150-1250) から M2 (1250-1350) の期間に *ful* が *swithe* を上回り、M3 (1350-1420) では *swithe* の強意用法がほぼ衰退していることが分かる。⁸

表 1 では形容詞、副詞、分詞を修飾する *swithe* と *ful* の生起数が 1 万語中の頻度として示されているが、この Méndez-Naya (2003) による調査は強意語の機能を形容詞修飾に限定した上で、出現数の頻度をグラフで比較しているため、このグラフでは動詞を修飾する *swithe* の生起数は含まれていない。

本論では動詞修飾の *swithe* と *fast* の生起数を調査し、これらの強意副詞としての頻度を比較する。表 2 (a, b) は動詞修飾の強意副詞 *swithe*, *fast* の生起数を 1 万語中の生起頻度として表したものである。*swithe* の生起数は、Méndez-Naya (2003) による統計に従い、生起数と頻度の数値を引用した。*fast* に関する

表 1 Data for intensifier *swithe* and intensifier *ful*, normalized frequencies per 10,000 words

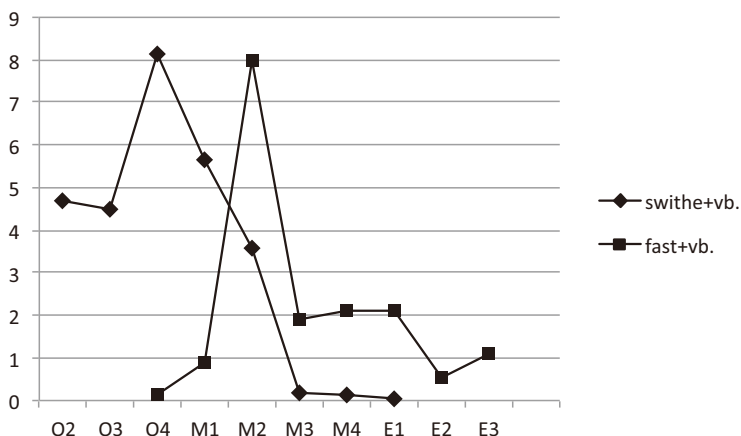


(Méndez-Naya 2003: 386)

表 2 a Data for *swithe* and *fast* as intensive adverbs, raw numbers and normalized frequencies per 10,000 words

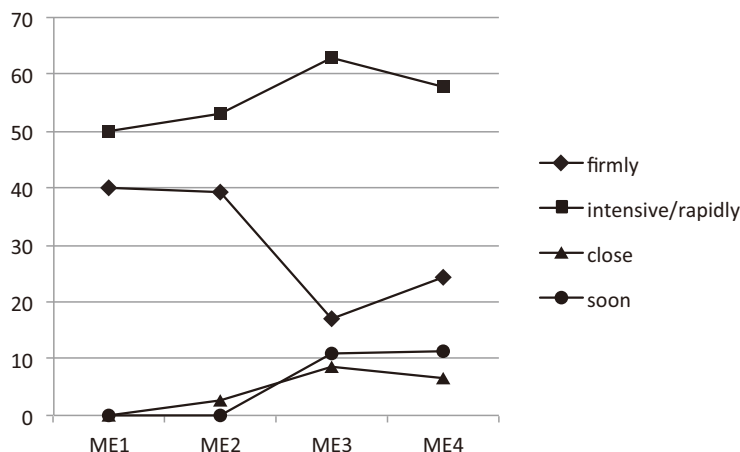
		O2	O3	O4	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3	
swithe+vb.	Raw Numbers	43	113	55	64	35	4	3	1	318		
	Normalized Frequencies per 10,000 words	4.67	4.49	8.16	5.66	3.59	0.21	0.14	0.05			
fast+vb.	Raw Numbers	1			10	79	35	45	41	10	19	240
	Normalized Frequencies per 10,000 words	0.14			0.88	8	1.89	2.1	2.1	0.52	1.1	

表 2 b Normalized frequencies per 10,000 words



る数値は独自に *Helsinki Corpus* を用いて副詞の生起数を調べ、算出した頻度を示している。

また、表 3 では *Helsinki Corpus* を使用して本論で独自に行った *fast* の意味分析結果を示している。この調査では、*fast* の生起数が上昇する M1 から M4 の期間における用例を、文脈を踏まえながら 1 例ずつ検討した上で、全用例を ‘firmly,’ ‘intensive/rapidly,’ ‘close,’ ‘soon/immediately’ の 4 つの語義区分に分類

表 3 Date for *fast*, frequencies for the four different meanings (ME1-ME4)

し、それぞれの語義の頻度がどのように推移したのかを明らかにしている。また、表3の語義分類では、‘intensive/rapidly’として強意用法と「速く」という意味に分類される用例を1つの語義区分にまとめているが、これはMEにおいて‘rapidly’の意味に振り分けられる*fast*の用例の共起動詞すべてに迅速の概念が含まれるためである。そのため、この時期には*fast*自体の語彙の意味として「速く」が定着していないと捉え、表3においてはこの意味を強意用法の一つとして扱っている。

これらのデータを参照すると、生起数の頻度はM1では*swithe*が圧倒的に多いものの、M1からM2にかけて*fast*の生起数頻度は*swithe*を上回り、M2からM3の期間に*swithe*の生起数は激減する一方で、*fast*はM2で最高値を記録し、その後も一定の値を保っている。このように両語の生起数を比較すると、表3で示されている通り、動詞修飾の強意副詞として機能する*fast*の生起数は、動詞修飾の*swithe*と十分に比較対象となりうる生起数を保っている。これまでの先行研究では強意語としての役割についてあまり注目されてこなかった*fast*であるが、このように語の生起頻度と、語義の頻度を合わせて考察すると、*fast*の生起頻度が高くなるM1からM3の期間において、最も高頻度で現れるのは強意用法であり、*Helsinki Corpus*を用いた今回の調査結果は、この語の強意語としての汎用性を示す一つの資料として位置づけられる。⁹

4. *swithe*, *fast* の語彙化現象

強意語は文法化に伴い脱語彙化を経ていると言及されることが多いが、実際にはさらにその後 *swithe* と *fast* は再び語彙の意味を発達させている。まずは脱語彙化と語彙化の定義を確認した上で、Méndez-Naya (2003) による先行研究の調査結果に加え、*fast* の意味変化については *Helsinki Corpus* を用いて独自に行った調査結果をまとめ、この二語を比較しながら、これらの語に強意語としての抽象的意味から具象的意味の発達があることを論じる。

4.1 脱語彙化の定義と語彙化現象

脱語彙化は、Partington (1993) では次のように説明されている。

In its extreme form, delexicalization can be defined as the reduction of the independent lexical content of a word, or group of words, so that it comes to fulfil a particular function but has no meaning apart from this to contribute to the phrase in which it occurs. For example, *very* adds little independent meaning; it is strictly an intensifier. (183)

この引用文におけるように、一般的には *very* の発達が例にあげられる場合が多い。*very* は本来の「真実の」という語彙の意味から、現代の「とても」といった単純な強意へと変化し、コロケーションの制限を設けない幅広い用法を得た。Lorenz (2002) は “intensifiers have become delexicalised, in some cases to the point of complete loss of their original conceptual meaning.” (157) と説明しているが、まさに *very* の強意語への発達は現代に至るまでの間に本来の概念的意味 (original conceptual meaning) を喪失した過程を表す代表的なものであると言える。このように脱語彙化とは、ある語彙が本来の lexical meaning (語彙的意味) を喪失し、強意語であれば、強意として機能する以外は特定の意味を持たない状態になることを言う。

次に、語彙化についてその一般的な定義を確認した上で、本論において語彙化という用語を用いて強意語の意味変化のプロセスを考察する意義について述べていきたい。文法化とは一般に史的变化の過程で内容語が機能語に変化することであるが、語彙化はこれとは逆のプロセスとして、語の史的变化の過程

で主として機能語が内容語に変化することであると説明される（辻 2002: 72）。具象から抽象へと変化する文法化および脱語彙化に対して、語彙化は抽象から具象へと変化する逆の性質を持つ現象である。そして先に述べたように、強意語は文法化や脱語彙化といった具象から抽象への一方向の変化を経験している語として研究がなされてきた。

確かに、強意語は本来持っていた語彙としての意味が抜け落ちていき単純な強意へと変化したものであるため、文法化を経験している。しかし、ここで着目したいことは、新たな語にとって代わられた後の、強意語の意味の行方である。その語自体が廃れ、廃用となっていく場合もあるが、*full* などに見るように強意語としての流行が去った後に、語彙の意味を再度獲得し、再び内容語となって使用され続ける語も多く存在する。本稿では、*swithe* と *fast* に観察される強意から迅速への意味変化を明らかにし、強意語の史的な意味変化の性質には語彙化が含まれる場合があることを指摘する。

4.2 *swithe* と *fast* の語彙化現象—用例分析を通して—

swithe の ‘strongly/violently’ から ‘very/very much’ への意味変化は、これまでの先行研究によって詳細なデータと共にその文法化のプロセスが考察されてきた（Méndez-Naya 2003; Tagliamonte 2007）。しかしながら、頻度の点では多少差異があるものの、*swithe* と同様に ME の強意副詞であった *fast* の意味変遷を扱う先行研究はなく、*fast* の意味の変動に関する詳細な数値はこれまで明ら

表 4 *OED*, s.v. *swithe*

<i>Beowulf</i> -1398	† 1. Qualifying a finite verb or a participle: Strongly, forcibly; very greatly, very much, extremely, excessively; in superl. most, most especially.
971 -c1450	† 2. Qualifying an adj. or adv.: Excessively, extremely, very. <i>Obs.</i>
c1175 -1907	4. Quickly, without delay, forthwith, instantly, immediately, directly, at once. Also as int. = Quick! hence! away! Now <i>arch.</i> or <i>dial.</i>
c1205 -1892	3. At a rapid rate, very quickly, swiftly, rapidly. Now <i>arch.</i> or <i>dial.</i>
a1300 -a1420	4. † b. <i>as (als, also) swithe as (alsswither)</i> , as soon as. <i>Obs.</i>

かにされてこなかった。本節ではまず *swithe* の強意語への発達と衰退について、先行研究の記述をまとめた上で、*swithe* の変化と類似した *fast* の強意語から ‘rapidly’ への意味変化を *Helsinki Corpus* の用例から考察していく。

以下は *OED* における *swithe* の各語義を初出年順に並べたものである。

上述したように、*swithe* は本来の ‘strongly’ といった意味から強意用法を発達させていった。表 4 から明らかなように、強意用法が衰退した後に発達した語義は *OED* の第 4 義の ‘quickly’ である。Méndez-Naya (2003) は *swithe* の強意から ‘quickly’ への発達について、以下のように説明している。

Bermen, bermen, hider swiþe!
Porters, porters, here quickly!
(QM2_NI_ROM_HAVEL: 26)

In fact, ‘quickly’ is the only possible interpretation of *swiþe* in construction with verbs in the examples extracted from M2, M3, M4 and E1, which shows that after 1250 its former primary function, verb degree modifier, was no longer available. The number of corpus examples in which *swiþe* can be glossed as ‘quickly’ amounts to 64. (Méndez-Naya 2003: 384)

13 世紀後半から *swithe* の支配的な意味は ‘quickly’ へと変化していったことが、その具体的数値からも明らかである。さらにこの強意から ‘quickly’ への変化について、Méndez-Naya (2003) は “The shift seems to have been from ‘move’ *swiþe* ‘strongly, powerfully, vigorously, violently’ > ‘move quickly’, a change which closely parallels that undergone by *fast*.” (383) と述べている。確かに ‘rapidly’ の語義を発達させる過程には共通した要因があり、その一つは *run* などの動作動詞との共起にあると考えられる。¹⁰ しかし、*swithe* が強意用法の後に発達させた ‘quickly’ の意味に関して Méndez-Naya (2003) は “The meaning ‘quickly’, which was at the beginning clearly context-dependent, soon became inherent to the adverb” (383) と述べ、‘quickly’ の語義については特別に着目されていない。‘quickly’ は “context-dependent” であった意味から後に “inherent to the adverb” と、副詞自体の語義として定着したと述べられているが、歴史的に概観すると、その他の副詞においても強意と迅速の意味は結びつきが強く、この点こそが着目されるべき現象であると言える。

表 5 a Semantic change of *fast*, frequencies for the 5 different meanings (M1-E3)

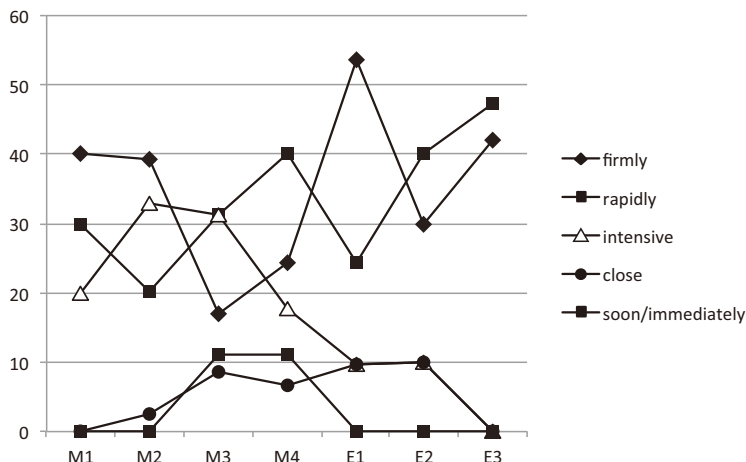
	firmly	rapidly	intensive	close	soon/ immediately	others	total (raw numbers)
M1	4 40 (%)	3 30	2 20			1 10	10
M2	31 39.2	16 20.2	26 32.9	2 2.5		4 5	79
M3	6 17	11 31.4	11 31.4	3 8.5	4 11		35
M4	11 24.4	18 40	8 17.7	3 6.6	5 11.1		45
E1	22 53.6	10 24.3	4 9.7	4 9.7		1 2.4	41
E2	3 30	4 40	1 10	1 10		1 10	10
E3	8 42.1	9 47.3				2 10.5	19

次に、*swithe* と同様に迅速の意味への変化を遂げている *fast* について *Helsinki Corpus* における用例の分析から支配的な意味の変動を見る。

M1 から E3 までの用例を共起動詞の意味特質および文脈を考慮しながら分類すると、表 5 (a, b) のような結果が得られる。表 5 では *fast* の用例を ‘firmly,’ ‘rapidly (運動の速度を表す意味),’ ‘intensive,’ ‘close,’ ‘soon/immediately (時間的な早さを表す、temporal deixis として解釈できる意味)’ の 5 つの語義区分に分類している。表 3 では強意用法に含めた ‘rapidly’ の語義であるが、ここでは分離させ、より詳細に意味変化の動きを観察することを目的としている。また、‘rapidly’ として振り分けている用例は、共起動詞に迅速の意味が含まれる例であり、その他の純粋な強意用法であると解釈できるものを ‘intensive’ として振り分けている。さらにコーパスを用いた意味分析では文脈の特定が困難である用例がいくつか出現するため、そうした用例は ‘others’ とした。

表 5 b では、意味別の頻度の推移を比較しているが、このように *fast* の強意副詞としての用法は M2 では ‘firmly’ の語義に続き 2 番目に多く、M3 では最も頻度の高い語義は ‘rapidly’ へと移り変わり同時に強意副詞としての用法が ‘rapidly’ と同頻度を記録している。そして強意副詞としての用法は M4 にかけて次第に減少し、E3 では完全に消失している。

こうして通時的に意味変化の動きを見ると、強意語としての用法はその他の

表 5 b Date for *fast*, frequencies for the five different meanings (M1-E3)

‘close,’ ‘soon’ といった語義と共に近代英語にむけて衰退にむかい、現代では廃用となっていくのに対し、原義である ‘firmly’ はどの期間も一定の頻度を保ち、‘rapidly’ の語義に関しては E3 では *fast* の最も一般的な語義へと上り詰め、その後現代英語においてもその位置を保っている。

しかし、ここで再び ME における ‘rapidly’ の語義は、動詞が持つ迅速の意味に依存したものであることを踏まえないといけない（表 3 を参照）。「rapidly」が完全に *fast* の語彙的意味として定着していくのは早くても EModE1 からである。そのため、やはり *fast* は Mustanoja (1960) も intensifying adverbs の一つに含めたように、ME では強意語としての側面が最も強く、後に動詞の意味に依存的であった ‘rapidly’ の語義が定着し、語彙的意味として固定化したと考えられる。

fast の場合は完全な文法化を遂げているとはいえないものの、本来の ‘firmly’ の語義から強意用法が支配的となった時期を経験した。現代の *very* のように完全に文法化した語は限られており、多くの強意語は「ある程度の文法化を遂げている」（Bolinger 1972: 17-22）と指摘されるが、*fast* の場合も脱語彙化の過程で強意用法が廃れたため、文法化をある程度経験した語であり、強意語の意味変化の過程を示す事例の一つである。

このように通時的な意味変化の流れをみると、*fast* も *swithe* と同様に、強意

語としての流行の後、再び‘rapidly’といった語彙の意味を獲得した。つまり、この二語は、強意用法の発達に伴う脱語彙化をある程度経験しながら、再度語彙化を遂げている。こうした脱語彙化の後に語彙化する変化の性質は、誇張・強調の効果が有限である強意語の不変的性質により合致した変化のプロセスであると言える。

おわりに

swithe と *fast* は、具象＞抽象＞具象という意味変化を経験し、*fast* の場合は強意副詞であった歴史は現代英語では感じる事ができないほどに、‘rapidly’という語義をもつ副詞として定着し、副詞の中でも非常に基本的な語彙の一つとなった。

swithe の場合は、着目される現象は文法化のプロセスであった。しかし、*fast* と非常に類似した意味変化の過程を持つ事実に着目すれば、この語も *fast* と同様に、本来の‘strongly’という語彙の意味から強意用法を発達させ、形容詞、副詞、動詞といった広範な品詞との共起を可能にしたという点で脱語彙化および文法化を遂げたあと、‘rapidly, quickly’という語彙の意味を獲得した。

現代では強意語は主に文法化のプロセスを検証する語として、研究対象とされている。しかしながら、*swithe* と *fast* の変化が示すように、いくつかの強意語の意味変化には、抽象領域から具象領域へと変化する流れがある。今後より多くの副詞における検証が必要であるが、文法化・脱語彙化といった一方向の変化だけではなく、流行語として常に新たな語に取って代わられる強意語の意味変化には脱語彙化の後に語彙化を起こすという変化の性質が存在すると言える。

Notes

- ¹ 文法化とは、内容語（動詞や名詞などの語彙的内容を持つ要素）が機能語（語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など）に通時的に変化することである（辻 2003: 231）。強意語の場合、脱語彙化は強意語として用いられるまでのプロセスを指し、文法化はより大きな変化の流れとして、本来は語彙の意味を持った内容語が強意語として独自のカテゴリーを形成し機能的に振る舞うようになることを言うため、語彙化は文法化の過程で起こる現象として論

じられる場合が多い。

- ² PP modifier は prepositional modifier を指す。
- ³ ただし maximizer と booster の区分は、完全に分離されたものではない。“They [utterly/violently] detested him.” といった文では、‘utterly’ と ‘violently’ の意味にほとんど差異は感じられないと述べられている。(Quirk et al: 591)
- ⁴ *fast* の強意用法は *HTOED* では “the mind » emotion or feeling » courage » bravery or boldness » in a brave manner” のカテゴリーの中に含まれている。強意語は “the external word” の区分に属しているので、*fast* は強意語とは根本的に異なるカテゴリーに属している。
- ⁵ *MED* 内でも強意語の統語的・意味の規定は明示されていないと言える。*swithe* は “as an Intensive or adverb of degree” と説明されているのに対し、*fast* は “as an intensive with various verbs” と、“adverb of degree” という呼称を与えられていない。
- ⁶ Mustanoja (1960) の用いている “modal adverb” および以下に引用している Partington (1993) における “modal” の意味はいわゆる「法副詞」と訳される現代英文法の “modal” の意味ではなく、“manner adverb” と呼ばれる副詞と同義のものであると考えられる。
- ⁷ OE の韻文、散文における強意語の用法については、Méndez-Naya 2003; Tagliamonte 2007; Peters 1993 を参照。
- ⁸ *Helsinki Corpus* の統計については、次を参照。O1 (-850), 2,190 words; O2 (850-950), 92,050 words; O3 (950-1050), 251,630 words; O4 (1050-1150), 67,380 words; M1 (1150-1250), 113,010 words; M2 (1250-1350), 97,480 words; M3 (1350-1420), 184,230 words; M4 (1420-1500), 213,850 words; E1 (1500-1570), 190,160 words, E2 (1570-1640), 189,800 words; E3 (1640-1710), 171,040 words.
- ⁹ また *fast* の強意用法については *OED* では *fast* の ‘earnestly, diligently’ といった強意的意味は 1644 年の用例が最終例となっているが (*OED*, s.v. *fast*, adv. 1. c)、これまでの Malory, Shakespeare 作品を対象にした調査結果をふまえると、15 世紀後半には強意用法は大幅に減少し、Shakespeare 作品を対象に行った調査では、その用例のほとんどが「速く」という語義で用いられており、強意用法は消失している。
- ¹⁰ しかし Méndez-Naya (2003) の引用における *OED* の用例解釈は、*OED* 自体が意図するものとは厳密には異なる。論文中では “a change which closely parallels that undergone by *fast* (see *OED* s.v. *fast* adv. 6a): to run *fast* ‘hard,

firmly' > *to run fast* 'quickly'" (383) と述べられているが、*fast* の 6a の語義説明では *fast* の 'firmly' から 'rapidly' への語義発達について「*run hard* といった表現を参照」とあり、この 'hard' は Méndez-Naya の解釈するような現代英語における強意としての「懸命に」などの意味ではなく、*run (a person) hard* といったコロケーションで「誰かのすぐ近くを走る、追い抜く」といった意味である。共通した要素もあるものの、*fast* の 'rapidly' への意味変化の過程は *swithe* よりも複雑な体系を描く。

Works Cited

- Allerton, D. J. "English Intensifiers and Their Idiosyncrasies." Ed. Steele, R. & T. Threadgold, *Language Topics: Essays in Honour of Michael Halliday*, vol. 2. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 1978. 15–31. Print.
- Biber, Douglas, et al. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. New York: Longman, 1999. Print.
- Bolinger, Dwight. *Degree Words*. The Hague: Mouton, 1972. Print.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge UP, 1993. Print.
- Kay, Christian, Jane Roberts, Michael Samuels & Irené Wotherspoon, eds. *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary: With Additional Material from a Thesaurus of Old English*. 2vols. New York: Oxford UP, 2009. Print.
- Klein, Henny. *Adverbs of Degree in Dutch and Related Languages*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 1998. Print.
- Kurath, Hans, et al. eds. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: U of Michigan P, 1952-2001. Print.
- Lorenz, Gunter. "Really Worthwhile or Not Really Significant? A Corpus-Based Approach to the Delexicalization and Grammaticalization of Intensifiers in Modern English." Ed. Ilse Wischer & Gabriele Diewald, *New Reflections on Grammaticalization*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 2002. 143–61. Print.
- Méndez-Naya, Belén. "Intensifiers and Grammaticalization: The Case of *Swipe*." *English Studies* 84 (2003): 372–91. Print.
- Mustanoja, Tauno F. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique,

1960. Print.

Partington, Alan. "Corpus Evidence of Language Change: The Case of Intensifiers." Ed. Mona Baker, Gill Francis & Elena Tognini-Bonelli, *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 1993. 177–92. Print.

Peters, Hans. "Degree Adverbs in Early Modern English." Ed. Dieter Kastovsky, *Studies in Early Modern English*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 1994. 269–88. Print.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman. 1985. Print.

Rissanen, Matti, et al. eds. *Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic and Dialectal*. Helsinki: Department of English, University of Helsinki, 1991. CD-ROM.

Sinclair, John. "Trust the Text: The Implications Are Daunting." Ed. Martin Davies & Louise Ravelli, *Advances in Systemic Linguistics*. London: Pinter, 1992. 5–19. Print.

Simpson, J. A. and Weiner, E. S. C., eds. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989. *OED Online*. Web. 30 Sep. 2012.

Tagliamonte, Salia. "So Different and Pretty Cool! Recycling Intensifiers in Toronto, Canada." *English Language and Linguistics* 12.2 (2007): 361 – 94. Print.

辻幸夫編. 『認知言語学キーワード事典』 東京：研究社, 2002.

Delexicalization and Lexicalization in Intensive Adverbs: The Case of *Swithe* and *Fast*

Sayaka Ogasawara

The study of intensifiers has long been a popular topic in English historical linguistics and much scholarly attention has been attracted to its process of grammaticalization and delexicalization (Sinclair 1992; Partington 1993; Lorenz 2002). As Lorenz (2002) points out that “there is a pertinent link between the stylistic qualities of hyperbole and expressivity on the one hand, and novelty in language on the other” (143), intensifiers can be said to be prone to be replaced by new ones since intensification or exaggeration cannot reside in the same word. Most previous studies have thus focused on its grammaticalization process and its frequent renewal tendency, and less attention has been paid to the meaning developed after delexicalization. The aim of this paper is to trace the semantic development of two intensive adverbs, *swithe* and *fast*, and to show that they have undergone the parallel process of lexicalization after they enjoyed status as intensifiers.

The article is organized as follows. Section 1 will introduce a brief methodology of this study. Section 2 defines the sense of ‘intensifier’ in this paper, examining the definitions among previous scholars and in *OED* and *MED*. Section 3 will trace the rise and fall of *swithe* and *fast* as intensive adverbs, and compare their frequencies in detail with the data in *Helsinki Corpus*. Section 4 focuses on the process of

lexicalization in *swithe* and *fast*. Section 4.1 clarifies the meaning of delexicalization and lexicalization, and explains the importance of paying particular attention to the process of lexicalization in intensifiers. Section 4.2 will illustrate the lexicalization process through the examination of the corpus data especially on the semantic changes of *fast*, compared to those for *swithe* as illustrated by Méndez-Naya (2003).

It is often said that most intensifiers have experienced a shift “from modal to intensifier” (Lorenz 2002), in other words, they lost their original content meaning, and are delexicalized to some extent or completely. Delexicalization and grammaticalization are terms that focus on the meaning shift from concrete to abstract, or in Lorenz’s words, from modal to intensifier. However, when we pay attention to the last meaning that intensifiers developed and the whole process that they underwent, it can be said that more intensifiers have changed their meaning from abstract to concrete as lexical items. This article will give a new insight into semantic change in intensive adverbs with a concrete > abstract > concrete recycling semantic nature.